

目 次

1	提案趣旨	1
2	提案内容	1
	(1) 本校の現状	
	(2) 研修の実際	
3	今後の課題	9
	(1) 授業研究会の改善	
	(2) 継続的な取組につなげる工夫	
	(3) 自主研修会の実施	

全員参加型の研修会のもち方の工夫

提案者 足利市立山辺小学校教諭 三柴 君予

1 提案趣旨

これからの時代を担う子どもたちの教育の場である学校において、校内研修は必要不可欠であろうと考える。21世紀型能力の育成が求められている学校においては、教師の資質能力向上のために、より主体的・協働的な学び合いのある研修が必要になってくると考えられる。

多忙な毎日の中で、教職員の閉塞感や無力感が高まることのないような環境をつくり、より良い教育実践をしていくためには、全員に共通の意識をもたせながら、力を十分に発揮させ、自主的に考え行動できる教職員を育てていかなければならない。研修会を通して、学び続けるモチベーションを維持できる環境を整備し、問題解決能力の向上を目的とした手法を体験し、教員の「研究と修養」の充実を図りたい。

2 提案内容

(1) 本校の現状

本校は、足利市でも児童数の多い学校であり、通常学級16、特別支援学級2に加え日本語学級や通級指導学級など、様々な学習環境の中で支援員を含め39名の教職員で指導をしている。また、教職経験5年未満の教職員が多く、中間層が極端に少ない。その結果、ベテランから若い教職員への指導という形の研修になったり、個人の指導力を評価するような側面が強くなったりすることも時折見られる。そのため、伝達型の研修に加え、体験を重視した参加型（ワークショップ）の研修を定期的に行い、参加者相互の学び合いの場を設けるようにした。

(2) 研修の実際

ア 事例研究会

スクールカウンセラーが学校に来る機会を利用して、事例研究会を行った。

実際の事例を挙げてもらい、事例提供者を中心として関わりのある教職員でグループをつくり討議した。スクールカウンセラーには、適宜グループをまわってもらった。

〈進行の仕方〉

- ①事例を提示する。
- ②質疑応答する。
- ③全員で、問題の原因として考えられることを挙げる。KJ法を用いて整理する。
- ④原因を仮定し、解決するために何をしたら良いか討議する。KJ法を用いて考えをまとめる。

⑤事例提供者が、明日から実施できそうなことを決めて発表する。

⑥グループごとに討議内容を発表する。

〈実施後の感想〉

- ・悩んでいたことを共有できて気が楽になった。
- ・問題解決に向けて行動する道筋が見えた。
- ・いろいろな考えを聞くことができ、自分のクラスの実践にも生かせると思った。



イ Q－U研修会

本校では、平成27年度に初めてQ－Uを取り入れ、児童理解の一助とし、児童指導に生かすために研修会を行っている。平成27年度は、栃木県総合教育センターより講師を招いて、Q－Uの目的、結果の見方、分析の仕方、それを学級経営にどのように生かしていくか、自分の指導を改めて振り返って今後の方針をどう考えるか、事例検討の仕方などについて研修を受けた。

平成28年度は、年2回実施し、1回目の実施後には、全体で分析の仕方や検討の仕方を確認し、2回目の実施後には、グループ検討会を行った。平成29年度の夏の研修では、Q－Uの結果を各自分析・考察した上で、グループごとに事例を提供してもらい、アセスメント・対応策を考えていく検討会を行う予定である。また、以降の実施についてもグループ検討会を行う予定である。

Q－Uについては、自分の学級の結果を自分で分析するだけでなく、様々なグループをつくり、結果を共有して、検討していく形をとっている。その際には、「全員ができるだけたくさんの考えを出し合うこと」、「決して事例提供者を責めるような言葉を使わずに、『私は～だから～と思う』というメッセージを伝えること」、「具体的にすぐにでもできることを出し合うこと」に留意するようにしている。

〈平成27年度 Q－U活用研修会〉

〈進行の仕方〉

- ①講話
 - ・ Q－Uについて
 - ・ Q－Uの目標
 - ・ Q－Uの留意点
 - ・ 望ましい学級集団とは
 - ・ Q－Uの結果の見方
 - ・ Q－Uを活用し、問題行動を未然に防ごう
- ②クラスの結果を見ながら、5色のマーカーペンを使って色分けし分析する。
- ③事例として挙げたクラスのプロット図等を見ながら、簡単に事例検討会をする。

〈事 例〉

H27. 6月実施 6年B組 学級編成の状況 2年目

①担任の先生の観察

<input type="checkbox"/> 問題と感じていること <ul style="list-style-type: none"> ・「みんなのために」自ら考えて、動ける児童が少ない。 ・自分の気持ちを伝えきれないでいる児童が多い。 ・相手の気持ちをあまり考えず行動してしまう児童がいる。
<input type="checkbox"/> 学級の公的なリーダーの児童（番号と簡単な説明） <ul style="list-style-type: none"> ・女子24番（学力が高く、発言に説得力がある。集団をまとめる能力はあるのだが、気持ちにムラがあり、自分に自信がない様子も見られる。） ・男子6番（責任感が強い。語彙が多く、発言力があるが、場面によっては、ネガティブな発言が目立つ。）
<input type="checkbox"/> 影響力の大きい・陰で仕切るような児童（番号と簡単な説明） 特になし
<input type="checkbox"/> 態度や行動が気になる児童（番号と簡単な説明） <ul style="list-style-type: none"> ・女子10番（明るく前向きであるが、落ち着きがない。物事に対して丁寧に取り組むことができない。場の雰囲気を感じ取ることができないため、不適切な発言がある。） ・男子11番（友だちを思いやった行動や発言ができないことが多い。努力することが苦手。）
<input type="checkbox"/> プロットの位置が教師の日常の観察からは疑問に感じる児童（番号と簡単な説明） <ul style="list-style-type: none"> ・男子20番（身体能力が高く、多方面で活躍している。周囲の友だちと笑顔で談笑する姿が多く見られる。明るい性格で根は真面目。地道に努力できるが、自分に甘い面もある。）
<input type="checkbox"/> 学級内の小グループを形成する児童（番号と簡単な説明） <p>男子 … 7、9、6、20、26 （マイペースな集団であるが、特に問題行動などは見られない。友人関係は良好）</p> <p>女子 … 16、17、24 （学習面や生活態度、共にクラスのトップをゆく集団である。互いに切磋琢磨し高め合っている。友人関係も良好だが、学級のために行動しようという意識が低い。）</p>
<input type="checkbox"/> 4群にプロットされた児童に共通する特徴（担任からみてどのような子が多いか） <p>満足群 … ・明るい性格で根が真面目な児童が多い。 ・自分のことよりも周囲のことを考えることができる。</p> <p>非承認群 … ・表面には出さないが、心の中の自分なりの思いを言えず、悩みを抱えている。</p> <p>侵害行為認知群 … ・友だちに対して、陰で悪口を言うてしまうことが多い加害者の立場にも関わらず、被害者意識が強い児童がほとんど。</p> <p>不満足群 … ・学習面・生活面において、自分の持っている能力を発揮できていない。 ・学級の中で自分をさらけ出すことに抵抗を感じている。 ・周りの空気を読みすぎるのか、自分の思いを発言できていない場面が多く見られる。</p>

②これからの指導の方針

(実態と把握のズレをみつけて修正していく (把握→把握された実態に対し
て有効性が確認されている先行実践の調査→実践の計画→実践→評価)

○対応の方針

自分の気持ちを伝えきれないでいる児童が多いため、学級目標の「1日
1回発言しよう」の目標に向かって、子どもたちが自信を持って自由に発
言できる雰囲気を作っていく。

○すぐにあること

- ・間違っただけを恐れる児童が多いため、「間違っても良い」という認識
を持たせる支援。
- ・発言する前に自分の意見に自信を持たせる支援。

○一斉指導では

- ・自由に自分の意見が発言できる雰囲気をつくるために、学活や道徳の時
間を利用して教室は間違っても良いところだという認識を高めていく。

○個別支援では

- ・自信をもって発言できるようにするため、授業中の机間指導に当たる。正答
や自分の考えを書けている児童には、丸をつけ、発言前に自信を持たせる。

〈終了後の感想〉

- ・事例を出して良かった。
- ・とりあえず明日から何をするか、決めることができた。
- ・情報を共有できたので、今後の指導に具体的に生かせる。
- ・いろいろなアイデアが出てきたので、選択肢が増えた。

〈平成29年度 Q－U活用研修会〉

何回かQ－Uの分析をしてきた経験をふまえ、対応策を考えていくことを中心
に研修をする。以下のようなシートを利用して対応策を考える。

学級集団づくりアセスメント・対応策

学級の状態を共通理解して、具体的な次の一手をみんなで考えましょう!!

1 プロット・担任報告から考えられる学級の状態・発達について

①ルールの確立度

〈5 (内在化)－4－3 (教師が指示すれば行動する)－2
－1 (反発され教師の指示が通りにくい)〉

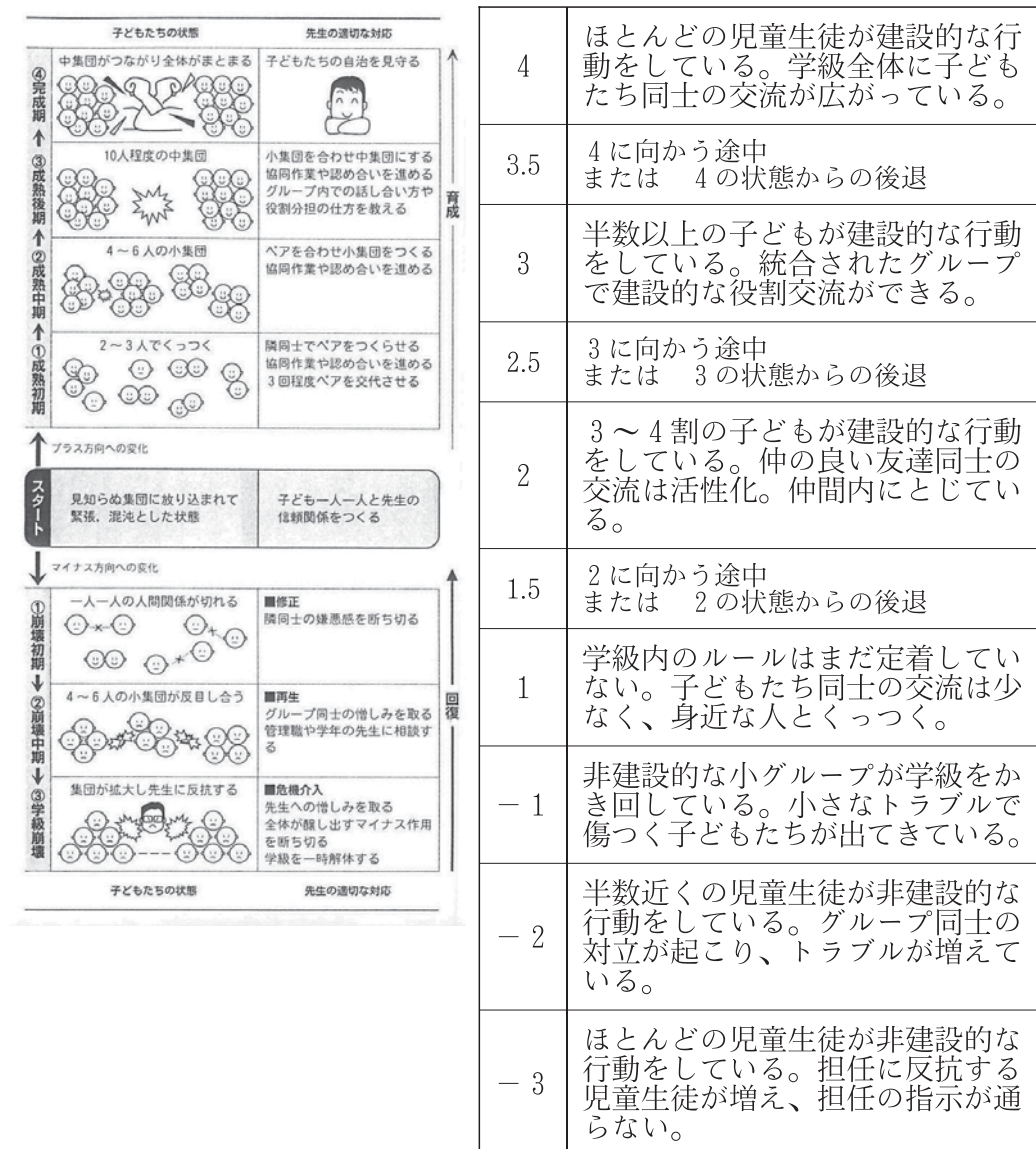
特記事項 ・バラつきが大きい ・二極分化
・まじめな子どもの被侵害感が高い
その他 ()

②リレーションの確率度

〈5 (親和的に全体に広がっている)－4－3 (小グループ内に閉じている)－2
－1 (グループ間対立・孤立・裏面交流・防衛的行動が顕著)〉

特記事項 ・バラつきが大きい ・二極分化
・まじめな子どもの承認感が低い
その他 ()

③学級集団の発達の方向・10段階の目安



イラストの出典：河村茂雄 2000 学級崩壊 予防・回復マニュアル 図書文化

2 仮説から考えられる対応策

④Q－Uの型（満足－かたさ－ゆるみ－拡散－荒れ始め－崩壊）
⑤総合的なアセスメント・仮説（このような状態になった要因として考えられること）
ではないだろうか？

〈大きな方針〉

- ・リレーション形成／承認感を高める
- ・ルールを確立する／被侵害感を低下させる

- ①学年の連携の仕方（T T、合同授業等、担任教師の役割の明確化）
- ②保護者への説明・協力態勢のあり方
- ③担任教師の対生徒へのリーダーシップのとり方のポイント
- ④授業の進め方のポイント
- ⑤学級活動の展開例のポイント（朝、帰りのホームルームも含めて）
- ⑥給食・掃除時間の展開のポイント
- ⑦時間外（休み時間・放課後）に必要な対応(個別面接・補習授業等)
- ⑧担任教師のサポートのあり方、作戦会議の計画

仮説に基づき、大きな方針を決め、①～⑧の内容から選択し、具体的な対応を提案する。

場面	具体的な対応の提案	留意点
⑥	〈例〉給食を一緒に食べ話しやすい雰囲気をつくる。	

ウ テーマ研究

平成27年度、28年度は、学年ごとにテーマを決めて、年間を通して研究を進めるという時間を設定した。たとえば、

- ①学年で教材研究を行い、授業実践後に児童の反応を報告し合って、改善する。
- ②語彙力アップを目指し、定期的に言語活動に取り組む。
- ③ワークシートを共作する。

などの取り組みが行われた。



〈例〉第2学年の取組

○実施記録

6月半ば	・M I Mのアセスメント 第1回
9月7日(水)	○読解力を高めるための教材研究…語彙の拡充と、文章をスムーズに読むための手立て ・国語「どうぶつ園のじゅうい」の教材研究 展開、導入の工夫、語句の洗い出し、視覚的教材の準備
9月上旬	・M I Mのアセスメント 第2回
9月14日(水)	・国語「どうぶつ園のじゅうい」の教材研究 視覚的教材作成(挿絵、写真拡大) 語句の意味揭示物作成 (単元の学習中、常時掲示できるように)
10月上旬	・M I Mのアセスメント 第3回
10月14日(金) 第4校時	・「どうぶつ園のじゅうい」1/12 2年1組 授業参観
10月19日(水) 第5校時	・「どうぶつ園のじゅうい」3/12 2年3組 授業参観
10月20日(木) 第1校時	・「どうぶつ園のじゅうい」2/12 2年2組 授業参観
11月上旬	・M I Mのアセスメント 第4回

○研究の成果

- ・言葉の意味の確認を1時間確保したので、文章の内容をより理解することができているように感じる。
- ・子どもたちが予想以上に言葉の正しい意味を理解していないことが分かった。
- ・挿絵や写真を掲示用に拡大して、視覚に訴えることができた。
- ・文節に区切って読む練習をしたことは、言葉をまとまりでとらえるための良い練習になった。
- ・テストでは9割近い平均点を記録し、あまり低い点数を取る子はいなかった。

エ 若手研修会

学年主任が運営委員会に出席している間、出席しない教職員が「若手研修会」という名で自主研修会を行っている。日頃の悩みを相談したり、講師を呼んで研修したりしている。

〈例〉

①図工

- ・ポスターの描き方について、各学年での取組を紹介し合う。
- ・水彩絵の具の使い方について話し合う。

②理科

- ・指導要領の確認をする。
- ・茎のつくりとはたらきについて実験・観察する。
- ・電流と発熱について実験・観察する。

③アドベンチャープログラム

- ・プロジェクトアドベンチャーについての話を聞く。
- ・いろいろなアクティビティを行う。

④情報機器の使い方

- ・d-Bookの使い方について研修する。

オ ミニ研修会

多忙な中、全員が集まって話し合う時間は限られているが、職員会議や現職教育の前後の10分～20分間の時間をとってミニ研修会を行っている。

〈例〉

職員会議を始める前の10分程度の時間に、参観した授業について、学びが成立していた点や疑問に思う点を付箋に書き、情報を交換し合った。また、自分の授業に取り入れやすいように、まとめたものを一定期間職員室に掲示した。このようなミニ研修会は、同じような意見や異なる意見についても適宜話し合えるので、理解を深める場のひとつとなっている。



3 今後の課題

(1) 授業研究会の改善

今までの授業研究会では、①授業者の振り返り、②研究の視点についてグループ別で協議、③グループで協議したことを発表、④質疑応答という進め方をしてきた。場合によっては、感想に終始する、発言する人が限られる、「声の大きい人」の意見で方向性が決まってしまう、専門外のことについては意見が出しにくいということもあった。参加者全員が意見を出し、充実感をもって参加できるような研究会にするために、研究主任として様々な研修運営の方法を学び実践し、さらに目的に応じた研修の手法を先生方が体験できるようにしていく研究会のもち方を工夫していく。

(2) 継続的な取組につなげる工夫

定期的に研修会の機会を設ける計画を立てるのはもちろんだが、全員が必ず集まるような時間を多く設定すると、多忙感や閉塞感を強め、続けていくことは難しくなる。そこで、毎週行っている学年会の中で、短時間でも自身の学びを振り返り、次の実践に生かす話合いの時間を設け、継続的な取組の場としたい。そこで出た情報は、学年主任会などを通して共通理解し、全員が同じ方向を向いて取り組んでいけるように工夫していきたい。

(3) 自主研修会の実施

好きな時間、好きな場所で、共通の課題をもつ人たちが集まり、形式にとらわれない研修会を設ける。結果を求めず、学びの過程を重視したり、気軽に話し合える場としたりして、同僚性を高める機会としたい。